Title	傷ついた魂へのスピリチュアルケア
Author(s)	窪寺, 俊之
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.59, 2015.3 : 15-24
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5486
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第四回日韓神学者学術会議】

傷ついた魂へのスピリチュアルケア

窪寺俊之

一　傷ついた魂へのスピリチュアルケア

傷ついた魂へのケアは旧約時代からのテーマで、今日に始まったものではありません。

（1）神の選民イスラエルの民にも国家を脅かす危機があり、民は深く傷つき、神の癒しを必要としました。「野に出て見れば、見よ、剣に刺された者。町に入って見れば、見よ、飢えに苦しむ者。預言者も祭司も見知らぬ地にさまよって行く」「……我々はあなたを待ち望みます。あなたこそ、すべてを成し遂げる方です」（エレミヤ一四・一八、二二）と嘆いています。[1] そこで行われたことは、「わたしがあなたと共にいて助け、あなたを救い出す、と主は言われる」（エレミヤ一五・二〇）とあり、神が傷ついた民を救い出すことを告げる宗教的ケアが行われたと言えます。

（2）近代科学が発達し心の病に精神医学が関わるようになりました。特に心理学と宗教の関係に関心を持った代表的人物としてカール・ユングをあげることができるでしょう。[2] 心の闇に科学的光を当てて治療しました。今日の精神医学やカウンセリングは傷ついた魂の治療に関わっています。そこで行われたことは、病む魂への心理学的治療と言えます。[3]

（3）一九六〇年代になるとスピリチュアルケアに関心が持たれた三つの出来事がありました。第一の出来事は、終末期がん患者へのシシリー・ソンダース医師によるホスピスの開設に伴う医療の分野でのスピリチュアルケアへの関心です。[4] がんに苦しむ患者は、何故、自分がこんな苦しみに遭うのかと苦しみの意味を問うたのです。それはスピリチュアルペインと言われています。第二の出来事は、『死の瞬間』を書いたキューブラー・ロス医師による、死に直面した患者は神様と取り引きをするという指摘です。[5] 例えば、「もしも私の生命をあと半年延ばしてくだされば、財産の半分を神様に捧げます」というように、自分のいのちの延長を願って神様と取り引きをすることを見出しました。この神との取り引きこそ、スピリチュアルなニーズです。第三の出来事は、一九九八年のＷＨＯ（世界保健機関）の執行理事会が、健康とスピリチュアリティの関わりを認めたことです。[6] しかし、翌年の総会では健康の定義の改訂には至りませんでしたが、スピリチュアルな健康への注目が広まりました。ＷＨＯが健康の定義に身体的、心理的、社会的健康に加えて、スピリチュアルな側面を加えることを検討したことは大変意義深いことです。

以上見たことでおわかりのように、国家が崩壊し、人々が深く傷つき自己を見失った時、宗教家が立てられて救済と希望を語ったのです。それは人々の悔い改めによる神の赦しと国家の復興です。また心理学者たちも、心病む人間の心の闇の部分に光を当てて、闇からの解放の道を探りました。そこで行われたのは人間の理性や知性を超えてすべての人に共通するスピリチュアルな世界に触れる治療でした。そして、今日、国民の三分の一ががんで死ぬと言われていますが、終末期がんという不治の病になると人は人間を超えた神様と取り引きして生命を長らえることを願うのです。宗教を持たない人々の中にも人間を超えた超越的存在に助けを求めるスピリチュアルな痛みがあります。

そして、今日、スピリチュアルケアという視点から人間の深い痛みや魂の傷の癒しを考え始めています。その一つが二〇一一年三月一一日に起きた東日本大震災と原発事故後の被災者へのケアです。

二　東日本大震災の出来事

（1）宗教家たちの働き

東日本大震災の出来事は、私たちの心と魂を揺さぶる出来事でした。多くの人が生命を奪われました。愛する家族、財産、生活の糧、心の支えを失ったのです。経済的、精神的、生活的基盤を失った衝撃は大きく、政治家、行政も生活基盤の確保に努めていますが、心の問題には心理学者が当たり、宗教家は傷ついた魂のケアに奔走しています。[7] 特にＰＴＳＤで苦しむ子供たちのために多くのカウンセラーや精神科医が働いています。[8] 日本の宗教者は、キリスト教、仏教、神道などの宗教者が協力して、被災地で大きな働きをしています。[9] キリスト教や仏教という宗派を超えて「宗教者」として互いの立場や違いを超えて働きを共にしています。それは宗教家によるケアではありますが、いわゆる宗教的ケアとは異なっています。特定の宗教への勧誘が目的ではなく、被災者の所に出て行って被災者の立場で援助するケアです。[10] 宗教者は自分の教会や寺や神社を出て、被災地に行き、宗教用語を敢えて使わずに、しかし、宗教家しかできない死、葬い、死後の問題に関わるケアをしたのです。

ひとつ例をお話ししましょう。津波で愛する人を亡くした家族は、怒りをぶつける対象がなく「何故、何故」と問いながら苦悩しました。津波で流された遺体は、個人の判別ができないほど傷だらけで土の中から見つかりました。遺体は目を覆いたくなるほどに痛々しい姿でした。遺体安置所で宗教者は祈りをささげ、読経をして手厚く葬りました。それを見た人は死んだ人が神仏の国に安らぐことができたと感じたのです。宗教家の祈祷や読経によって、亡くなった人

はこの世からあの世に移ることができたと実感できて、生き残った人の悲しみが鎮まりました。死後の魂が神仏の世界に移れたのは宗教家による宗教的儀式によったのです。その意味で宗教家の存在の意義は大きかったのです。その働きは、宗教的でありながら、特定の宗教に勧誘することを目的にしないのです。

（2）求められるスピリチュアルケア

このような自然災害は人生を支えていた物質的基盤、基本的価値観、宗教観を壊しました。その中で人はスピリチュアルなものに助けを求めました。危機に直面すると生得的に持つスピリチュアリティが顕著に覚醒して、人を支えるものを求めます。

スピリチュアル（spiritual）の語源はスピリットで、風、息を意味しますが、創世記二章七節にあるように、神が人に息を吹き込むと、人は生きたものとなったのです。人間を支える基本的な要因を指しています。スピリット（spirit）は古典ギリシャ語のπνευμα（プネウマ）、ヘブライ語のרוח（ルーアハ）で心や精神を現します。今日の「スピリチュアル」という語は、勇気、活気などの意味を含んで用いられています。これらのことから目に見えない超越者との関係を作る機能を人間は生得的に持っていて、生命維持機能として働きます。大震災、津波、原発事故は既存の価値観や世界観を破壊しましたので、人は新しい人生の土台をスピリチュアルなものに求めたのです。神秘的・宗教的でありつつ、特定の宗教に縛られないですべての宗教を包み込むスピリチュアルな世界に助けを求めました。すべてのいのちの根源であり、私たちの全存在にいのちを与え、生きる目的を示し、傷ついた魂を癒すものです。傷ついた魂に生きる力や希望を与えるケアをスピリチュアルケアと呼んでいます。

このような理解に立つと、スピリチュアルケアは傷ついた人のスピリチュアリティを最大限に尊重するケアとなりま

す。スピリチュアルケアは宗教的ケアや心理的ケアと非常に接近した概念でもありますが、宗派にこだわらず患者や被災者のいのちをスピリチュアルな側面からケアするものです。[11]

スピリチュアルケアとは、宗教的教理や制度を超えて、痛んでいる人に寄り添い、その人のスピリチュアリティ（人生の基盤）を支えながら、一歩ずつ歩むことです。そこに宗教的ケアとは異なるスピリチュアルケアがあります。宗派が持つ教理にケアの資源を求めるのではなく、その人のスピリチュアリティを支え、強めるケアです。その人の内にある目に見えない超越的存在者との関係を支えるのです。スピリチュアルケアが重視するのは、痛む人の立場に立って考える寛容性や柔軟性です。

三　聖書のスピリチュアルな視点

私はここで聖書が示すスピリチュアルな世界を三つ見たいと思います。第一は、イエス・キリストがなさった働きは、人々を律法の束縛から解放して神の愛に導いた、ということです。[12]当時のイスラエルでは祭司や律法学者によって人々は律法に縛られて苦しんでいました。イエスは「彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうとしない」（マタイ二三・四）と言って当時の宗教的指導者を激しく非難しました。律法は本来よいものであったにもかかわらず、人々を苦しめていたことは、注目しなければなりません。第二は、イエスが徹底的に強調した創造の神との関係です。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（マタイ二二・三七）と言っています。[13]創造の神こそ、私たちのいのちの根源であり、愛の神であり、永遠に変わることのない私たちの人生の基盤になるのです。そこでは古い宗教は破棄されるべきで、いのちを生

かす新しい信仰が必要だったのです。第三は、聖書が示すスピリチュアルな世界がすべてのいのちを肯定し、すべての違いを認め、共に生きる道を開くことです。特に、イエスは社会の底辺で苦しんでいる人や病を負って差別された人、人間としての誇りや自尊心を失った人々に目をとめ、声をかけ、手を差し伸べて生かしてくださったのです。イエスキリストは宗教を作りませんでした。むしろ、自らが外へ出ていき人々と出会ってくださったのです。「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を述べ伝え、また民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」（マタイ四・二三）。その姿は当時の宗教者の宣教の仕方を超えていますが、それがかえって、つまり人を束縛から解放し、宗教の本当の心を真に生かす働きを実現したと言えるでしょう。そこにイエスキリストのスピリチュアルケアがあったと言えると考えます。

四　スピリチュアルケアの役割

今まで傷ついた魂へのスピリチュアルケアの本質について述べてきました。

スピリチュアルケアは、ケアする者がキリスト者の場合や仏教者の場合もあります。ケアする者は自分のスピリチュアルな立場に立ちながら、癒しの業を行います[14]。「癒し」は傷ついた心や魂の治療や自己回復だけではありません。分裂や対立、憎しみと暴力、紛争と戦争の悲劇を作り替えて、理解と和解、協力と助け合いという再生の物語を生み出します。新しい再生物語は過去の苦しみや悲しみにも新しい意味と価値を見つける物語です。苦しみや悲しみを新しい世界創造に積極的に生かしていく再生の思想です。私たちはスピリチュアリティの世界に和解と再創造の可能性を見ることができます。国家、民族、文化の間にある壁を破ってより広い視野と世界観に立つ、平和を創り出す可能性をスピリ

チュアリティの中に見るのです。

五　スピリチュアルケアラー

スピリチュアルな考え方は垂直的超越的存在のみ不変で真実だと信じるので、自己絶対化や正当化はしません。神仏や超越者の前ではすべての人が相対的存在だと認める謙遜さを持ちます。そこで患者、被災者、傷ついた人が主役であって援助者はサーバント（servant 奉仕者）だと理解します。援助者＝サーバントには他者への愛と誠実さが必要です。同時にサーバント（servant）は神の眼差しの中で他者に仕えます。Servant と同じ語源（ラテン語 servit → slave）を持つ言葉にサービス（service）があります。援助（サービス）とは、神への礼拝です。サービスは「奉仕、仕える」の意味の他に、「礼拝、神を仰ぐ」の意味があります。サーバントは自分の信じる神を礼拝し常に自分が新しくされながら、傷ついた人たちへ愛と誠実さを持って仕えます。「奉仕」は、その思いはあっても実践することは容易ではありません。現実的に長期に奉仕する人は多くはありません。その理由は、奉仕には、忍耐と自己犠牲が伴うからです。そこで人に仕えようとしたら礼拝が不可欠です。常に新しい生命の注ぎが必要だからです。個人にとって礼拝の在り方は異なるでしょう。しかし、静まって神の声を聞き、内なる自己を深めるならば、自己の弱さや脆さに気づき謙遜にさせられて、神に生かされるしかないと気づくでしょう。そこで気づくのは神の愛と力に押し出され、支えられている自分です。この愛と力が与えられてはじめて、希望を持つことができて、弱い人や傷ついた人に仕えることができるのです。

今、世界は民族や宗教の違いが関わる国際問題に直面しています。戦争、飢餓、差別、人権侵害が多発して、多くの

人が傷つき希望さえ失っています。日韓の神学者が互いに主を見上げつつ祈り合い、共に知恵と力を合わせて世界平和のために励んでいきたいと願います。[15] スピリチュアルな視点は、民族や宗教の違いを認めつつ、それを互いの間の壁とせず、互いに尊敬し学び合う機会とします。スピリチュアルな体験は、自分の最も深い自分に触れるもので、その体験が人を謙遜にし、愛の大切さに気づかせ、平和の大切さを教えてくれます。スピリチュアルな思考はすべての人が生きることができる新しい時代を創造する原点になると信じています。この日韓神学者学術会議が高い知性と深いスピリチュアルな体験を持つ学術会議として発展するようにとお祈りいたします。

謝辞

本稿は、二〇一四年一一月七日、聖学院大学で行われた第四回日韓神学者学術会議での講演に加筆したものである。本稿の本体は会議での発表とほぼ同じであるが、注や文言の説明を加筆した。当日参加された韓国長老会神学大学校の諸先生方と聖学院大学の教員と大学院生、一般の方々に心からの感謝を申し上げたい。

注

(1) A・ワイザーはこの箇所を註解して次のように語っている。「神に立ち帰るならば、神は、神に対して不信実な態度をとるこの時にもなお、かって彼に与えた約束のことばを堅持し、臨在と救援をもって彼を支えるであろう、と」。『エレミヤ書私訳と註解』ATD旧約聖書註解、月本昭男訳（ATD・NTD聖書註解刊行会、一九八五年）、三五三頁。ユダヤ教の神中心の救済が語られている。

(2) C・C・ユング『心理学と宗教』ユング・コレクション3、村本詔司訳（人文書院、一九九五年）。
(3) 同上書、一九、二二、三〇一頁。
(4) シャーリー・ドウブレイ『シシリー・ソンダース――ホスピス運動の創始者』若林一美訳（日本看護協会出版会、一九八九年）。
(5) エリザベス・キューブラー・ロス『死ぬ瞬間――死とその過程について』中公文庫、鈴木晶訳（中央公論新社、一九九八年）。
(6) Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity. 公益社団法人日本WHO協会ホームページを参照。<http://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html>（二〇一四年一一月二〇日アクセス）
(7) 富田博秋「災害精神医学に関する研究課題」特集東日本大震災からの復興に向けて――災害精神医学・医療の課題と展望、『精神神経学雑誌』116（3）、（日本精神神経学会、二〇一四年）、二三一―二三七頁。
(8) 本谷亮「東日本大震災被災者・避難者の健康増進」『行動医学研究』19（2）、（日本行動医学会、二〇一三年）、六八―七四頁。
(9) 東北大学臨床宗教師、臨床宗教師養成プログラムは龍谷大学、高野山大学にも波及している。その趣旨は「超宗教・超宗派の協力と学びあいを通して養成される宗教者である」とあるように、独自の教義に片寄らないで人々のニーズに応えることを目的にしている。宗教的中立性が人々の間で歓迎されている。
(10) 谷山洋三「スピリチュアルケアと宗教的ケアの相違」、清水哲郎、島薗進編『ケア従事者のための死生学』（ヌーヴェルヒロカワ、二〇一〇年）、三五〇―三六二頁。
(11) 窪寺俊之『スピリチュアルケア学序説』（三輪書店、二〇〇四年）、一頁。
(12) 律法学者は律法に精通して律法を生活の基準に据えていた。彼らは民の指導者として律法の遵守を民に求めたが、それは民を裁き苦しめることになった。彼らの心は律法に縛られていて、民には注がれていなかった。それに対して、イエスの心は民の一人一人に注がれていて、民の苦痛を自らの苦しみにしていた。イエスにとって律法は、神の愛の表現であって、人々を苦難から解放することであり、イエス自身が神の愛の具体化であった。

(13)「すべてが、神の愛・隣人愛の倫理とパリサイ的律法主義の対立に焦点を合わせている」。E・シュヴァイツァー『マタイによる福音書――翻訳と註解』NTD新約聖書註解、佐竹明訳（ATD・NTD聖書註解刊行会、一九八六年）、五八五頁。

(14)「癒し」とは、病気からの回復、元気になるなどの意味。英語 heal は、to be whole である。参照：D・D・ウィリアムズ『魂への配慮』窪寺俊之訳、（日本基督教団出版局、一九八一年）、一五―一八頁。

(15) 平和には、社会的平和と精神的平和がある。社会的平和とは、国家間に戦争や紛争のない状態。積極的には政治的、経済的、文化的にお互いを理解し、共存し合う状態を示す。精神的平和とは、憎しみ、怒り、恐怖がないこと、さらに安寧、平静、寛容、愛の状態。平和は他者との関係性の問題である。国家間に争いのない平和な状況、他人との間に憎しみや怒りのない状態があり、さらには神様との間に恐れや罪責感のない状態。新約聖書に平和は「実現するもの」（新共同訳、マタイ五・九）とある。平和は人間の知恵と努力で作り出すもので、与えられるものではない。平和の構築には相互理解、相互尊重が不可欠である。自己絶対化、自己正当化は平和の構築には禁物。翻って考えると、宗教は平和を語りながら、戦争や紛争に巻き込まれてきた。宗教の名の下に戦争が正当化された。宗教は戦争で亡くなる人に慰めをもたらす役割を果たしたが、戦争の中止や平和の構築のための絶対的力にならなかった。宗教の持つ自己正当化は戦争を正当化する道具になりやすい。スピリチュアルケアの思想は、相手を認めて生かす思想である。宗派や教派の壁を越えてスピリチュアリティで理解しあい、認め合う思想が求められている。